

令和7年度 自己評価表(中間)

鳥取県立倉吉東高等学校

中長期目標 (学校ビジョン)	1 主体的学習者の育成 2 21世紀をリードする人材の育成	今年度の重点目標	1 学校の魅力化・特色化の推進・発信と中高連携の強化 2 定時制教育のさらなる充実 3 生徒支援の充実と業務改善の取組
-------------------	----------------------------------	----------	---

○評価基準 A 80%以上(概ね達成) B 60～80%(一定の成果がある) C 40～60%(さらなる努力が必要) D 40%以下(現状が改善されていない)

【全日制課程】

年度当初					評価結果()月		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
学校の魅力化・特色化の推進	国際バカロレア(1B)教育の実施と波及(グローバル人材育成重点校) GP2・CP1	・1期生、2期生ともに前向きに学びに取り組んでいる。 ・1年次生の全員がLHR・総合探究の時間でコア科目を広げた講座を受けている。 ・令和6年度について、図書館の活用指標(来館者数×貸出冊数)を1000としたところ、この指標を上回った日は16%だった。	・80%以上の生徒がATLスキルを習得した上で、同スキルを活用しようとしている。 ・コア科目については、生徒がその学習意義を理解し前向きに取り組んでいる。 ・各教科3人以上の教員がIBワークショップを修了するとともに、DP授業に係る理解を深められている。 ・図書館活用指標を600に再設定し、この指標を上回る月が7ヶ月以上となっている。	・各授業担当者が、各教科のガイドに基づきATTを踏まえた授業を実践する。 ・教科横断の会(M&I)で、それぞれの学年の授業担当者の協働設計を推進する。 ・先進校視察に教員を派遣するとともに、全教職員対象の校内研修会を開催する。 ・生徒向け図書館オリエンテーションを開催し、図書館の有用性を伝えるとともに、図書委員会の主体的な活動を促進する。	・IB系3年生と2年生に授業評価アンケートを実施し、ATLスキルの獲得・活用が着実に進んでいると判明した。 ・国際バカロレア教育(以下、IB)先進校である沖縄尚学高等学校に理科教員1名を派遣した。 ・外部有識者を招聘し、全教員を対象に、探究的な学びに係わる手法及びIB教育に特徴的な授業づくりを生かした指導力向上研修を実施した。 ・生徒向け図書館オリエンテーションについては計画どおり開催できた。 ・図書館活用については、4月、5月、7月そして9月が指標を上回った。 ・「鳥取県民の日」には、生徒図書委員会が主体となって独自行事を実行し、県民意識を高めた。	B	・IBの学びを深めれば深めるほど、生徒自身が自らの足りないスキルや知識を見だしやすくなる、と判明したことから、形成的評価及び総括的評価を重視した授業改善を行う。 ・DP授業づくりのポイント及びIB教育に学校全体として取り組む上でのポイントについて学ぶ先進校視察並び校内研修会の時期を再設定する。 → 最終試験(Final Exam)等、重要な取組を最優先する日程を踏まえる ・電子書籍サービスの導入 → 図書館の機能をより向上させるとともに「図書館の授業教室化」も推進する
	生徒主体の探究学習の実践(探究活動重点校) GP5・CP2	学びのスキルアンケート結果(R6肯定回答変化:4月→11月) 【1年生】(177人/199人 回答率88.9%) コミュニケーションスキル 55.4%→59.8%(+4.5) 自己管理スキル 23.1%→45.0%(+22.1) リサーチスキル 28.2%→56.0%(+27.8) 思考スキル 30.0%→54.8%(+24.8) → 1年生はすべてのスキルにおいて上昇 【2年生】(166人/179人 回答率92.7%) コミュニケーションスキル(※) 84.2%→72.7%(-7.5) 自己管理スキル 21.8%→50.9%(+28.1) リサーチスキル 33.3%→67.1%(+33.8) 思考スキル 34.6%→61.8%(+27.4) → ※探究活動に係る経験値と知見が深まり、生徒の自己評価レベルの基準が上がったことが反映されていると思料	・コミュニケーションスキルの肯定回答が80%以上もしくは有為的な上昇率となっている。 ・思考スキルの肯定回答が60%以上もしくは有為的な上昇率となっている。 ・異文化交流活動の生徒参加が促進されている。 ・地域社会、地元大学、関係企業と連携した探究的な学びが展開されている。 ・現実社会の諸課題について生徒が当事者意識を持ち、課題解決に向けて挑戦していく意欲が育成されるとともに自己のキャリア形成とのつながりが持っている。	・探究学習について、生徒自身がPDCAサイクルを回す支援を継続する。 (例)・iFLATsのスキルに関する調査をとおして探究学習の成果を測定する。 ・学校が独自で作成したアンケートをもとに定期的に振り返りを行う。 ・iFLATsとの定期的な意見交換をとおして、探究学習に係る内容面での継続的な改善を図る。 ・高等学校課事業等を有効活用する等、異文化交流の機会を生徒に積極的に提供する。 (例)鳥取県・米国バーモント州青少年交流事業 ・国際交流事業に参加した生徒の変化変容を適切に評価する。	・鳥取県からの依頼を受け、昨年度探究活動成果(ナイスナイス)がEXPO 2025 大阪・関西万博に展示された。 ・倉吉市やiFLATs(小田急電鉄)との連携並びに横浜市立大学との連携(新規)が奏功し、生徒の創意工夫に富んだ探究活動が展開されつつある。 ・地域に出かけ、地域とかかわり、地域と協働する探究活動に積極的に取り組む生徒が増えつつある。 ・2年生5名が韓国・江原道研修に(7月下旬～8月上旬)、1年生1名が鳥取県・米国バーモント州青少年交流事業に参加するとともに(10月)8名を受け入れた(4月)。	B	・「探究的な学び」に係る研修の継続 → 「アンラーニング」がもたらす指導力向上について、より多くの教職員が実感する必要がある ・探究的な学びに係わるPDCAサイクル実施スキルの強化 → 事業フィードバック、生徒個別フィードバック等、振り返りを徹底する ※iFLATs保有データの展開と活用指導 ・探究活動を「可視化」する指導体制の確立 → やらせっぱなしに終わることが決してないよう、「成果物をつくる」という指導を丁寧に実行する
	生徒の学ぶ意欲の向上と授業改善(探究活動重点校) GP1・CP1	・令和6年度学校評価アンケート結果によると、「授業に満足している」と回答した生徒比率が83%となっている。 ・各教科でPBLを取り入れ、探究的な学びを推進している。 → 生徒が学習内容を課題解決に活用する意識については十分ではない。 (例) 令和6年度授業アンケートにおいて「学習内容を地域や社会解決に結びつけて考えることができている」と回答した生徒 55% ・主体的に学びを進められている生徒の育成が急務である。 (例)令和6年度授業アンケートにおいて「自分で計画的に学びを進めている」と回答した生徒 53%	・各教科において、生徒の学ぶ意欲が向上している。 ・生徒の発達段階に応じた学習班編成を有効活用した授業が展開されている。 ・令和7年度学校評価アンケートにおいて「授業に満足している」と回答する生徒比率が90%以上となっている。 ・総合的な探究の時間・LHR・学校行事が、生徒にとって充実したものになっている。	・現行教育課程を検証し、改善できるものは次年度に改定する。 → 抜本的な改訂については、R9年度を目指し、今年度から検討に入る。 ・課題解決型授業及び主体的な学びに係る校内研究授業や公開授業を実施し、授業改善に努める。	・改善要望について協議・検討し、一部改訂の上、令和8年度教育課程を編成し、より適性化を図る。(申請中) ・本年度の授業改善の主軸を「良質な発問」に設定し、各教科に授業改善をテーマとした研究授業及び公開授業の実施を促した。また、地域社会への授業公開期間・SOTO学びウィーク(10月1日～10日)においても同テーマで実施した。 ・教科指導の探究的な学びの導入や教科主導の活動への転移については、十分に促せていない現状がある。	C	・教育課程検討委員会の立ち上げ → R9年度実施予定教育課程について検討を始めるとともに、5年後、10年後の本校を見すえた教育課程の策定に着手する ・PBL実施状況調査及び各教科の研究促進 → 校内研究授業及び公開授業を各教科で必須化する → 探究的な学びに係わる手法を用いた授業改善の状況を把握し、PDCAサイクルを実行する → 研修機会もこまめに提供する
	学力の伸長による進路目標の実現 GP5・CP3	・主体的な学習者の育成を目指して学年、教科、分掌等が連携して取り組んでいるが、基礎学力の定着が不十分なために進路目標を下げざるを得ない生徒がいる。 ・学力の多層化が顕著であることを踏まえ、生徒個々の発達段階を適切にみとった指導が必要である。 ・生徒自らのキャリア形成について考える機会として、首都圏研修、アントレプレナーシップ講演会、東大会、医学会等の取組や進路学習を設定している。	・様々な観点から自らのキャリア形成に適した進路目標を設定し、その実現に向けて計画的・主体的に学習に取り組んでいる。 ・自己の進路目標の実現に資する確かな発揮学力を習得している。 ・高い志を掲げた上で、様々な学習活動や課外活動に意欲的に取り組んでいる。 ・令和7年度学校評価アンケートにおいて「倉吉東高の進路指導は充実している」と回答する生徒比率が90%以上になっている。	・講演会や進路学習等の内容をさらに充実させることをとおして生徒が自らのキャリア形成について深く考える機会を提供する。 ・生徒との個別面談を充実させるとともに、果敢な探究活動を奨励することをとおして、自らの進路目標の達成に向けて主体的に取り組む姿勢・態度を育てる。 ・進路検討会や学年会等を有効活用し、生徒個々の進路目標実現に向けた具体的な方策を協働的に講じる。 ・進路指導テストや校外模試等の結果を授業デザインや課外指導に往還的に活用し、生徒の学力向上を図る。	・自分を振り返り、自らのキャリアについて深く考える機会を得る上で、進路学習や進路講演会、首都圏研修やアントレプレナー講演会、大学説明会や職業講演会等が奏功している。 ・面接週間等を活用して定期的に担任面談が行なわれ、生徒が今後の具体的な取組に着手できたり、進路実現について本音で話し合う機会が得られたりしている。 ・他方、昨年度の探究活動成果を活かした総合選抜型入試の受験希望者が少数に留まっている現状がある。 ・学び推進委員会や各学年会で模試結果等を分析・共有し、学力向上のための方策について具体的に協議した上で、学年毎の取組に繋げたり、学習活動の振り返りや改善に役立てられたりしている。	B	・進路行事のより明確な意義づけ → なぜ、何を目指し、どのような学びを行うのかについて都度言語化し、より多くの生徒・教職員の参加・参画を促す ・探究活動成果を有効に活用した進路指導の充実 → 2年次の探究活動を3年次の学習意欲及び果敢にチャレンジする進路実現に繋げる等、探究学習重点校としての強みを生かした、戦略的な体制の充実を図る ・模試結果分析・検討の充実 → 生徒の学力に責任を持つ教科指導を先導する
	国際交流の充実(グローバル人材育成重点校) GP3・CP4	・アジア圏内の学校と連携し、生徒が共同研究を行っている。 (連携先)セントジョセフ高校(シンガポール)、安養高等学校(韓国)、桃園高校(台湾)、バギオ大学附属科学高校(フィリピン) ・英語による「発表」「やりとり」「ディベート」等に係る指導が、全学年で計画的に実施されるまでには至っていない。 ・英検の本校準会場受験廃止等を踏まえ、生徒が実践的な英語力を伸ばすための学習モチベーションを戦略的に引き上げる工夫が必要である。	・生徒の英語によるプレゼンテーション能力及び交渉力(スキル)が向上している。 ・CEFR:B2(英検準1級)レベルが5名以上、B1(英検2級)レベルが80名以上になっている。	・バギオ大学附属科学高校生徒を本校に招待し、英語による模擬国連や異文化交流活動を実施する。(予定:9月) ・生成AIを利用した言語活動の充実に取り組むとともに(国費事業を活用)、英語教員研修会を実施し、授業における英語のやり取り等を効果的に導入する。 ・英検の他、IELTSやTOEFL等の受検を奨励するとともに、受検・合格状況について検証する。	・アジアパシフィックカンファレンスを実施(9月17日)(参加校)バギオ大学附属科学高校(フィリピン)、安養高校(韓国)※オンライン、本校 計 30名程度 ・模擬国連形式での英語ディスカッションや異文化交流活動を実施した。 ・生成AI「ELSA speak」(スピーキングアプリ)を授業に導入し、生徒のアウトプット活動における発音確認として活用中である。自宅学習に効果的に取り入れている生徒もいる。	C	・生成AIを活用した指導方法研修 → 外部有識者(大学教授等)を招聘した研修会をとおして実践的にそのノウハウを習得するとともに、より実践的な英語学習に係わる生徒の動機づけを図る ・英語外部検定試験受験(結果)状況のデータ化(検討中)

学校の諸活動の推進・発信と中高連携の強化	生徒の人間性の涵養に繋がる学校行事・部活動の実践GP4	・令和6年度末でテニス部とアーチェリー部を廃部としたものの、全校で91.1%の部活動加入率となっている。(令和7年4月末現在) ・生徒会部が所管する学校行事について、生徒会事務局や学園祭実行委員会を中心に多くの生徒が主体的に関わろうとしている。 → (例)令和6年度学校評価アンケートにおいて「学園祭を中心とした生徒会活動に誇りが持てる」と回答した生徒 91% ・令和6年度については各種中国大会に多くの部が出場するとともに国民スポーツ大会クライミング競技の部での入賞があった一方で、これ以外に全国大会で活躍する部がなかった。	・部活動が生徒の自己表現の場であると同時に主体性や自律性を育む場となっている。 → 部員全員を巻き込んで向上心溢れる集団に成長している。 ・令和7年度学校評価アンケートにおける生徒会活動や学校行事に係る項目において、肯定的に回答する生徒比率が90%を超えている。 (項目例) ・学園祭を中心とした生徒会活動 ・部活動は充実している	・部活動において生徒の自立と自律を促す働きかけを続ける。 → 特に部室管理の点では、部員一人ひとりの意識と自覚を高め規律を守るよう、指導の機会を積極的に創出する。 ・学校行事の実施にあたり、関係する生徒を中心に事前の相談や調整を重ねた企画・運営に努める。 ・学校行事や部活動を通じて、自己の成長が感じられるような「競い合って成長する機会や「互いに称えあい労う機会」を設けることをとおして、生徒に共感する感性と力を育てる。	・3年生のアーチェリー部員が個人と団体で、ラグビー部が7人制で、そして男子ソフトボール部がそれぞれ、全国大会への出場を果たした。 ・国民スポーツ大会(滋賀)では、陸上部3名が鳥取県代表として出場した。 ・不定期に実施している部室点検と毎月1回実施している部室清掃/部室ゴミ出し等の活動をとおして、生徒による部室管理の意識付けを行った。 ・前期は、対面式、TEAS学習会、部紹介、学園祭、スポーツ大会と生徒会行事を実施した。	B	・部活動においても、生徒の日々のあり方や(学校)生活面からの指導を徹底する → 考えさせ、教えた上で自立と自律を奨励する ・前期に集中する各種生徒会行事の適切な引継ぎを行う
	育友会・同窓会・地域との連携	・育友会総会に230名の保護者が参加。本校教育活動に係る保護者の興味関心には高いものがある。 ・育友会のどの事業においても、活発な活動が展開されている。 ・同窓会総会並びに支部総会も開催され(東京、東海、関西等)、活発な活動が展開されている。 ・育友会各事業並びに同窓会をとおして、本校における国際バカロレア(IB)教育の進捗状況が報告されている。	・育友会総会の保護者参加者数が250名以上となっている。 ・保護者と教職員が一体となって生徒を学習面、生活面で具体的に支援できている。 ・同窓会総会参加者数が100名以上となり、相互の親善が図られるとともに、各自の向上発展に寄与し、母校との連携がより密になっている。	・育友会並びに同窓会役員と学校とが十分に連携し、育友会事業や同窓会活動を活性化させる。 ・育友会及び同窓会の諸活動をとおして、本校における国際バカロレア(IB)教育の魅力や特徴に係るPR活動を活性化させる。	・育友会総会に220名の参加がある等、育友会事業に係る保護者の関心の高さが依然として感じられる。 (例)育友会によるスポーツ大会(秋)での支援を行った ・同窓会活動も例年どおり盛況のうちに展開できている。 ・育友会や同窓会の協力もあり、IB教育並びに本校の取組に係る地域社会の理解が徐々にではあるが深まりつつある。	B	・本校国際バカロレア教育のリアルに係わる、育友会及び同窓会への定期的な情報提供 ・県外生徒募集に係る地域との連携(継続) → 男子生徒については従前どおり倉吉寮で対応するが、女子生徒については地域と連携して対応する予定にしている
	学校に関する情報の発信と中高連携の強化	・学校ホームページにおけるリアルタイムかつ頻繁な記事発信について、保護者並びに学校関係者から高く評価されている。 ・本校SNSフォロワー数も増加傾向にあり、2400人を越えた。 ・令和6年度育友会総会開催日の午前中、中学生及び保護者を対象とした授業公開を行ったところ、多数の参加者を得、盛況であった。 ・参加者アンケート結果によると、中学生体験入学(7月下旬)は、本校生徒をチューターとした校内案内や座談会について前向きな意見が多い等、概ね好評であった。	・本校ホームページがより魅力的なものとなり、内容面においても情報発信力が向上している。 ・SNSにおいても、本校教育活動に係る情報がリアルタイムで発信されている。 → SNSフォロワー数が2600名以上になっている。 ・令和8年度入学者選抜における総志願者倍率が1.0倍以上となっている。 → 中学生体験入学参加者数が320名以上となっている。	・本校の魅力や特色のPRIに資するリアルタイムな情報発信に努める。 ・育友会広報委員会と連携し、本校教育活動に係る保護者の一層の理解と支援を促進する。 ・中学生体験入学や高校説明会の内容のさらなる充実を図る。 ・中学生目線をより重視する等、本校国際バカロレア(IB)教育の魅力・特色を戦略的に発信する。	・学校ホームページの記事発信が頻繁に更新され、保護者並びに学校関係者から好評を得ている。 ・SNSフォロワー数、閲覧回数とも増加傾向にある。(3,000人超(9月現在)) ・授業公開とセットで育友会(PTA)総会を開催したところ、多数の来校者を得、盛況であった。 ・中学生体験入学(7月下旬、2日間)については、教職員ではなく在校生(希望者)がチューターとして対応するよう構成したところ、参加中学生から大変好評であった。	A	・「学校案内」の刷新(進行中) → 生徒目線と高校生ならではの感性を生かして、本校の魅力や特色をPRする ・中学生体験入学参加者数増加に向けたしかけ → 本年度は昨年度比で大幅減となった背景、要因を分析し、対策を練る。 ・教職員のマインドセットを定期的に確認する → 地域社会は、本校生徒の姿やありようにも本校の魅力と特色を見る。

年度当初					中間評価()月		
評価項目	具体的項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
定時制教育のさらなる充実	全ての生徒への安心安全で居心地のよい環境の提供	・授業規律が守られるとともに、ICT活用も含め生徒の学習到達度に合わせた学習内容となるよう工夫した結果、生徒のやる気と集中を促せている。 ・生徒会執行部が中心となって運営される各種行事が、学校生活を継続する上で生徒の励みになっている。 ・毎日の打合せで生徒の情報を共有することとおして、生徒個々に適した統一感のある迅速で適切な指導につなげられている。 ・特性を持つ生徒への合理的配慮については検討の余地がある。	・規律ある学習態度が維持され、学習の意義や目的を理解した上で意欲的に学んでいる。 ・安心安全な環境のもと、生徒全員がルールやマナーを守り、他者を尊重することができている。 ・生徒間の相互理解や連帯感が高まり、自己の成長を感じられる雰囲気醸成されている。 ・教職員と生徒の間に良好な信頼関係が構築されている。	・授業のユニバーサルデザイン化、分かりやすい教材の工夫、Chromebookを活用した個別最適化された演習等を取り入れ、理解を促す指導を行う。 ・生徒が提案し、主体的に運営する生徒会活動となるよう支援する。 ・個々の生徒が抱える問題の解決に必要な支援や指導法について専門機関等との連携を強化するとともに、講師を招いた教職員研修等を充実させることをとおし個に応じた支援を行う。	・生徒の発達段階や理解度に応じた個別指導が奏功し、生徒は概ね落ち着いて学習に取り組めている。 ・生徒会執行部の発案による企画が生徒会行事に多数採用され、年次を超えた交流の高まりがみられている。 ・生徒が抱える問題や直近の様子・動向等に係る情報を日々、教職員連絡会をとおして共有するとともに、個別の対応方針について共通理解するよう努めている。 → 担任を中心に保護者との連絡も密に行っている	B	・ICT活用法に係る教職員研修の実施 → 学びの到達度等の差異により丁寧に対応することを目指す ・対人コミュニケーション力向上に係る1,2年次生の支援・指導の強化 ・個別最適化に焦点化した専門機関等との連携
	生徒の人間的成長や進路目標の達成のための教育活動のさらなる充実	・授業に真摯に取り組み、学校行事や生徒会活動を肯定的に捉え、進路目標の実現を目指して学校生活と就労の両立に努めているが、学び直し途上の生徒も多い。 ・生徒会役員に率先して立候補する生徒も多く、生徒会執行部員は教職員の協力を得ながら各種行事の企画・運営を行っている。 ・各種講演会、校外研修、職場見学、体験活動等を実施し、生徒の進路意識が高まるように促すが、具体的な進路目標を立てる時期が遅い傾向にある。	・授業に対する生徒の理解度や満足度が高く、それが学力の伸長につながり、一人ひとりの進路目標が実現されている。 ・生徒が自己と他者を大切にし、人間的に成長するために、学習活動に加え、学校行事や生徒会活動に意欲的に取り組んでいる。 ・様々な教育活動や社会体験をとおして、生徒が自尊感情を高め、社会で自立していく上で必要とされる力を身につけている。	・学び直しを取り入れながら、生徒の学習理解度を適切に把握して授業を進め、個に応じた学習内容を提供することとおして学習意欲を促し、満足度の高い授業を行う。 ・生徒が主体的かつ意欲的に学校行事や生徒会活動等に取り組める環境を整える。 ・各学校行事の内容を見直し、生徒が自身の生き方・あり方を考え、自己実現に向けて具体的に取り組むきっかけになるよう工夫する。	・学び直しの視点を意識した授業実践により、多くの生徒が意欲的に学習している。 ・定通総体や生徒会行事等が着実に生徒間コミュニケーション量の増加に寄与しており、社会性や他者への配慮が育まれつつある生徒が増えている。 ・各種講演会や体験活動等が、自分の生き方やあり方に係わる新たな視点を得たり、前向きなマインドセットに繋がっていることが生徒感想文からうかがえる。	B	・授業互見の推進 → 学び続ける職員集団でありたい ・生徒会活動成果の継承指導強化 → 他者への継承やコミュニティへの貢献をとおして自己肯定感の醸成に繋げる ・3年次生進路決定後の指導強化 → 人間的な成長に資する動機づけを効果的に行う

年度当初					中間評価()月		
評価項目	具体的項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	次年度に向けての改善方策
生徒支援の充実と業務改善の取組	環境の変化、ストレス、人間関係等に対応した生徒への心身両面でのサポート	・様々な課題を抱えることから心身のバランスを崩し、登校できない、登校しても教室へ入りづらいうという生徒が散見される。 ・ポスト・コロナにおける学校行事等の再開に伴い、経験値が浅いのには無理をしてしまったり、入学前段階における集団活動の経験の乏しさに起因すると思われる疲労感や不安を抱える生徒も散見される。 ・令和6年度学校評価アンケート(生徒)において「倉吉東高の先生方は信頼できる」と回答した生徒が88%、保護者は90%となっている。 ・令和6年度学校評価アンケート(保護者)において「倉吉東高は生徒や保護者の思いをくみ取って教育活動をしている。」と回答した保護者は87%となっている。	・生徒が抱えている課題や悩みについて教職員が正確に把握し、生徒とともに解決策を考へることができている。 ・教職員が様々な場面で個々の生徒の情報を共有し、外部関係機関等と連携しながら、組織的な支援体制を構築できている。 ・令和7年度学校評価アンケートにおける「倉吉東高の先生方は信頼できる」「倉吉東高は生徒や保護者の思いをくみ取って教育活動をしている。」と回答する生徒並びに保護者比率がそれぞれ90%以上となっている。	・生徒や保護者との面接結果やアンケート調査結果並びにhyper-QU結果等の検討を通じて、生徒の悩みや生徒が本当になりたい姿(自分)についての理解を深める。 ・教員間の連絡・連携を密にし、必要に応じて医療機関や福祉機関、行政機関と連携を取り、専門家の同席のもと支援会議を開く等具体的な支援計画を策定するとともに、実行と振り返り、改善のサイクルを効果的に回していく。	・SC等、専門家の指導助言を踏まえた校内特別支援委員会並びにhyper-QU結果検討会を開催し、当該生徒の現状をリアルタイムで把握するとともに、関係職員が共通の認識を持って具体的な協働・連携に取り組めるよう努めている。 ・外部専門機関との連携が必要と判断されるケースについては、教育相談担当主査と学年(担任)とが連携し、外部専門機関との連携が必要なケースについては適切に判断でき、当該生徒の効果的な支援に繋がられている。	B	・委員会や検討会の年間スケジュール並びに事前準備の工程等に係る共有データを作成する → 事前の情報交換を充実させるとともに資料を協同的に作成する ・生徒支援をタイムリーに行うことができるような委員会・検討会日程の設定を行う
	・業務内容の見直し・長時間勤務者の解消	・令和6年度全日制について、時間外業務の年間合計が360時間を超える教職員が17名となった。(令和5年度比+6名) ・定時制では、学校行事や校務分掌のバランスが図られており、時間外業務は少ない状況にある。	・時間外業務の年間合計が360時間を超える教職員が10名以下となっている。 ・週休日の休養日設定や適切な活動時間等、本校における部活動の活動方針がすべての部活動で守られている。 ・業務内容を精選し、各分掌及び学年で業務カイゼンに着手できている。	・時間外業務、部活動の計画・実績とも、管理職が積極的に声かけをするとともに、適宜支援・指導する。 ・業務カイゼンに係る臨時職員会議を開催し、コンセンサスを得ながら「できるところから」具体的なカイゼンに取り組む。 ・月に1～2日、ノー会議DAYを設定する。	・依然として時間外勤務時間の多い教職員と昨年度比で減少している教職員との二極化が顕在化しつつある。 ・部活動に係る適切な計画と実施について、管理職が定期的にチェックし、必要に応じた指導を継続している。 ・ノー会議DAYは毎月設定、実施されている。	C	・管理職による業務分担並びに進捗状況の管理 → 業務分担に偏りがないよう配慮するとともに、スケジュール管理等を支援する → 時間外業務量について管理職が毎月、定期的に状況を確認し、適宜指導する